

F・デュレンマットの「物理学者たち」論  
——核時代の作劇術——

荒木 詳二

外国文化論研究室

Über “Die Physiker” von F.Dürrenmatt  
—— “Die Physiker” als Atomstück ——

Shoji ARAKI

Department of World Civilization

**Zusammenfassung**

Wie Möbius in “Die Physiker” von Friedrich Dürrenmatt behauptet, ist die Wissenschaft schrecklich geworden, die Forschung gefährlich und die Erkenntnis tödlich. Im 20. Jahrhundert scheint die Wissenschaft an die Grenzen des Erkennbaren gestoßen zu sein. Durch die Erfindung der Atomenergie und die Herstellung der Atombombe wird das Verbrechen der Physiker als Erbsünde betrachtet. Die Kluft zwischen den Physikern und dem Volk ist so groß wie nie zuvor geworden.

Besonders nach dem Zweiten Weltkrieg wurde das sogenannte Atomstück eins nach dem andern veröffentlicht, z.B. “Leben des Galilei” von Bertolt Brecht, “Das kalte Licht” von Carl Zuckmayer, “Die Physiker” von Friedrich Dürrenmatt und “In der Sache J.Robert Oppenheimer” von Heinar Kipphardt.

Die Komödie “Die Physiker”, deren Uraufführung 1962 im Schauspielhaus Zürich stattfand und ein Welterfolg wurde, ist heute aktueller denn je. Warum? Weil das Stück raffiniert und humorvoll darstellt, wie tief die Krise der modernen Wissenschaft ist, wie opferwillig die Helden, die drei Physiker, handeln und wie hilflos, paradox und grotesk die Welt von heute aussieht. Insofern kann man das Werk ein der besten im Genre des Atomstücks nennen.

Erwähnenswert ist auch, dass die Wissenschaft eine Art von Ideologie ist, wie Dürrenmatt in diesem Stück behauptet. In unserer Zeit könnten Wissenschaftler alle Menschen vernichten, obwohl die Aufgabe der Wissenschaft die Erleichterung der menschlichen Bemühungen sein sollte. Durch das Bild des Kernphysikers, der seine Theorie zurücknimmt, hat Dürrenmatt betont, wie mächtig und schrecklich

die moderne Wissenschaft als Ideologie sein könnte.

## 1

二十世紀は、人類が自らを全滅させうる核兵器を開発した「核の時代」であり、また核開発を推進した物理学者たちの「原罪の世紀」であった。戦争を繰り返す二十世紀の国家は、自然科学とくに物理学の急速な発達と結びついて、地球上には元来存在しない原子核反応を利用した原子爆弾を作りだした。1945年こうした軍事技術革命は広島・長崎への原爆投下という最悪の結果をもたらした。原爆がもたらした想像以上の惨状を経験して原爆の父と呼ばれるユダヤ系アメリカ人の核物理学者オッペンハイマーは1947年「現代世界における物理学」と題した講演で次のように述べた。「戦時中のわが国の最高指導者の洞察力と将来についての判断によってなされたこととはいえ、物理学者は、原子兵器の実現を進言し、支持し、結局その成就に大きく貢献したことに、ただならぬ内心の責任を感じた。これらの兵器が実際に用いられたことで、現代戦の非人間性と悪魔性がいささかの容赦もなく劇的に示されたことも、われわれは忘れることができない。野卑な言葉をユーモアや大げさな言い方でごまかそうとしても消し去ることのできない、ある明らかな意味で、物理学者は罪を知ってしまった。」<sup>1)</sup>

しかしこうした科学者たちの反省にもかかわらず、第二次世界大戦後は戦勝国米ソ間で緊張が高まり、1948年にはベルリン危機が起こり、1950年には朝鮮戦争が勃発して、東西両陣営間の軍拡競争にますます拍車がかかることとなった。1952年にはアメリカは原爆をはるかに凌ぐ威力をもった水爆の実験に成功し、翌年ソ連も水爆実験に成功した。1955年には反核をアピールする著名な科学者たちの「ラッセル・アインシュタイン宣言」が出されたが効を奏さず、1959年アメリカが大陸間弾道ミサイルを配備すると、もう翌年にはソ連も同ミサイルを配備した。

こうした米ソの果てしない軍拡競争の最中、二十世紀の科学者の責任をテーマとし、グロテスクな世界の姿を描いたフリードリヒ・デュレンマットの「物理学者たち」がチューリヒ劇場で初演された1962年は、「ベルリンの壁」が建設され新たなベルリン危機が発生した翌年に当たり、同年には第三次世界大戦の恐怖に世界中が怖えたキューバ危機が発生している。こうした緊迫した世界情勢の下、同年9月のミュンヘンでのドイツ初演後、翌年1月にロンドンで舞台にかけられたこの作品は、64年にはブロードウェイ公演で大好評を博し、「貴婦人の帰郷」と並んでかれの代表作となった。

一部の核物理学者と一部の覇権国家の権力者に人類の運命が任されているという世界の危機を、デュレンマットはこの「物理学者たち」で、精神病院を舞台に精神病患者を装う一人の天才的物理学者と二人の東西両陣営のスパイ兼物理学者、それに本当は狂人である精神病院の女性医師兼院長の姿を通して描いた。この作品では今世紀物理学者たちが原爆製造を進言し、製造し、実験し、広島と長崎の悲惨きわまる状況を生み出したという歴史的事実が欠かすことのできない前提となっている点も忘れてはならないだろう。

科学は政治や宗教のような純粋なイデオロギーではないかも知れないが、原爆製造さらには戦後の

水爆製造の過程を見れば、科学が目標を設定し、目標達成に参画し、時として思いがけない事態を引き起こす点では、確かにイデオロギー的機能を果たしているといえよう。物質の美学的秩序を表現する科学は中立的であるとする従来の一般的な科学者の科学観に反して、現代のように科学が国家権力と緊密に結びつくとき、科学は中立ではありえず、イデオロギー的機能を果たすようになる。科学史家佐々木力は科学の価値中立的な考えを批判してこう述べている。「テクノロジーはつねに一定のコンテクストの中でつちかわれ、一定の<イデオロギー>として社会内で機能する。それは技術の内的論理に従うとともに政治的次元を併せ持つ。悪いのは政治意図で、技術はいつも無垢だとするのは素朴である。」<sup>2)</sup>

イデオロギーとしての科学はまた現代資本主義と深く結びついている。十九世紀後半以来の先進資本主義国における修正資本主義的傾向に関して、ハーバーマスは「イデオロギーとしての技術と科学」で次の二点を挙げている。第一に体制の安定を確保するための国家の干渉行動の拡大。第二に科学を第一次生産力たらしめる研究と技術の相互依存の増大。<sup>3)</sup> さらにハーバーマスはウェーバーが資本主義の発達をもたらすとした「合理性」の概念に異を唱え、合理性は生産力の現状に対する批判の尺度であるだけでなく、現代では現秩序を正当化する尺度となっているとし、こうした生産力と生産関係の新しい関係を世界史的に新しい出来事とする。今や科学と技術の合理性は、論理学に由来するのではなく、一定の内容をもち、歴史に規定されることになる。ハーバーマスはこうした状況をマルクーゼを引用して説明している。「たえずいっそう有効な自然支配へと向かう科学的方法は、ついで、自然支配を媒介とした人間の人間に対するたえずいっそう有効な支配のため、純粋な概念および道具を提供することとなった。」<sup>4)</sup> この科学と支配権力の融合、合理性と抑圧の融合という新しい現象に注目し、マルクーゼは先進資本主義国のイデオロギーを批判した「文化と社会」で技術的理性のイデオロギー性を強調している。「技術的理性という概念は、おそらくそれ自体がイデオロギーである。技術の利用ではなく、技術そのものがすでに<自然と人間に対する>支配であり、方法的、科学的、功利的、打算的な支配である。支配権力の特定の目的や利害は、<事後的に>、技術のそとからはじめて授与されるのではなく、すでに技術的装置の構造そのもののうちにはいりこんでいる。技術はときに歴史的社会的投企であり、そこには、ある社会とその支配的利害が人間と事物をどうあつかおうと考えているかが投影されている。支配権力のそのような目的は、<物質的なもの>であり、そのかぎり、技術的理性の形式そのものにふくまれている。」<sup>5)</sup>

このような技術至上主義というイデオロギーは、脱政治化された国民の意識のなかにはいりこみ、支配の正当化の役割をはたしているのである。ハーバーマスはイデオロギーとしての科学は人間相互間の交流を妨げ、文化的危機を招くという結論に達している。「このイデオロギーは、意志疎通に関わる行動の関連体系や、記号に媒介された相互行為の概念に関する社会の自己了解を妨げ、それらの体系や概念のかわりに科学的なモデルを提出するうえで、独特の効力を発揮する。」<sup>6)</sup>

こうしたイデオロギーとしての科学という認識は、劇作品「物理学者たち」理解の前提として欠かすことはできないと思われるが、最後に現代の科学技術の置かれている危機的状况については是非触れ

ておきたい。「現代の科学的テクノロジーのディレンマを、対処にもっと緊急性が必要とされる言葉で表現するならば、それは<不可逆性>という用語である。ある技術を社会の中に取り入れ、制度化したゆえに、社会の<健全な>存続すら危ぶまれる事態、引き返すことが不可能となる状況を指す語彙である。現代テクノロジーには<不可逆>という烙印が押されるべき少なからざる形態が存続しているのである。」<sup>7)</sup>

## 2

戦後のドイツ演劇では核がテーマとなった作品 (Atomst]ck) が多数発表された。デュレンマットの「物理学者たち」も、ブレヒトの「ガリレイの生涯」(1938年-39年執筆) やツックマイヤーの「青い光」(1955年初演) やキップハルトの「オッペンハイマー事件」(1964年初演) と同じくこのジャンルに属する。この中では、スパイ行為を行った物理学者クラウス・フックスをモデルとした「青い光」はやや趣を異にするが、オットー・ハーンの核分裂成功(1938年)のニュースを聞きながら執筆したといわれるブレヒトの「ガリレイの生涯」も、記録演劇「オッペンハイマー事件」も、「近代科学の原罪」を「物理学者たち」同様直接のテーマとしているが、そのなかでもこの「物理学者たち」は、グロテスクな形にせよ、現代のイデオロギーとしての科学のあり方が最も鮮明にとらえられて、それゆえもっとも現代性を備えているとあっていいのではないだろうか。ブレヒト劇も、キップハルト作品も、現代科学の危機的状況に対する把握が弱いし、人間の自由に関する現代的な感覚が欠如しているようにも思われる。

デュレンマットの「物理学者たち」に関する作品研究では、従来ハンス・マイヤーを始めとしてブレヒトの「ガリレイの生涯」とこの「物理学者たち」の比較研究がしばしばなされてきたことは、前述したように両作品が同じジャンルに属すること、さらにデュレンマットに対するブレヒトの影響の大きさを考えれば当然のことといえよう。ここでもまず両作品の比較から「物理学者たち」の考察を始めたい。

ブレヒトは「<ガリレイの生涯>の作品及び上演に関する諸注意」という文章で、作品の主題について、教条主義的とも思える考えを述べている。「ヴァルター・ベンヤミンが述べたように、この作品の主人公はガリレイではなく、民衆である。しかしこの表現もわたしにはいささか舌足らずに思える。この作品では、社会がいかに個々人から自分に必要なものをゆすりとるのかを、わたしは示したいのだ。研究欲というものは社会的な現象であるが、性欲におとらず快楽的で圧倒的なものである。そしてこの研究欲はガリレイを危険な領域に導き、研究欲とほかの満足を求めるかれの激しい欲望との葛藤へとかれを追い込むのだ。」<sup>8)</sup>

ブレヒト研究家野村修は「<ガリレイ>断想」という論文で、この作品の主人公に触れ、次のような説明をしている。「かれの劇は、大衆そのものによる解決が必要な問題を、大衆のまえに提起するための技術、という側面をつねにもっており、劇の主体は大衆であり、また大衆を劇の主体-歴史の

主体として自覚させようとする。この主体の不在が—あるいはこの主体を発見し、拡大し、活動させることができなかつたことが—ガリレイの場合には、かれの〈原罪〉となった。」<sup>9)</sup> こうしたいわば歴史的背景を無視した公式主義的解釈はもちろんブレヒト自身にその責任があると思われるが、この劇の核心は、イデオロギーとしての科学とイデオロギーとしての宗教の闘争の中で自説の撤回をめぐる悩む科学者ガリレイの悩みにあるのであって、歴史の原動力としての民衆の役割の強調にはない。

社会から個人を見る見方、歴史の原動力を民衆に求める考え方をデュレンマットは確かにブレヒトから引き継いでいるが、デュレンマットは社会主義リアリズムに代表されるような教条主義からは免れているように思われる。デュレンマットは「物理学者たち」の末尾につけた「〈物理学者たち〉に関する二十一条の諸注意」でこう述べている。「人類全体に関する問題を一人で解決しようとする個人のあらゆる試みは挫折せざるをえない。」<sup>10)</sup> ここで問題にしているのは個人の生き方であって、民衆の行動ではないことに注目しなければならない。そもそも「ミシシッピー氏の結婚」のユーベローエ、「約束」のマテーイ警部から、「物理学者たち」の主人公のメービウスにいたるまで、デュレンマットが力を込めて描く主人公たちは、解決困難な問題を一人で解こうとするドンキホーテ的な人物である。ブレヒトの公式主義的な言説と比較するとき、個人と社会の狭間で苦悩する個人が浮き彫りになっているデュレンマットの言葉には、二人の個人主義・自由主義に関する意識の違いがはっきりと示されているといえるだろう。

「ガリレイの生涯」はすなおに啓蒙主義を、さらには啓蒙主義を極端化したともいえる社会主義を素直に信じることでできた劇作家ブレヒトによって書かれた。キーワードは理性・新しい時代・民衆の時代である。劇の冒頭場面には新しい時代の到来が宣言される。

ガリレイ …二千年もの間、人間は太陽も天空のすべての星々もすべて自分たちの回りをつけていると信じてきた。教皇も枢機卿も、学者も領主も、船長も商人も、魚屋のおかみさんも学校の生徒も、みんなこの透明な天球の真ん中で動かずにいる思ってきた。でも、アンドレア、大航海に出發するんだ。古い時代は終わり、新しい時代がきたからさ。…<sup>11)</sup>

これに対して「物理学者たち」の冒頭のト書には、狂気に陥った物理学たちとかれらの犯罪が示される。ガリレイの理性に対する物理学者達の狂気、ガリレイは人類を善導するが物理学者たちは殺人を犯す。そもそもガリレイは書斎にいるが、物理学者たちの居場所は精神病院なのである。冒頭の長いト書のなかでの主人公達に関する記述はこうある。「かれらは各々自分たちの想像世界に引きこもって自分勝手に暮らしている。サロンで一緒に食事をとり、時々は学問に関する議論をしたり、黙ってぼんやり前方を眺めやったりすることもある。愛すべき、聞き分けのよい、扱いやすい、控えめな狂人たちである。一言でいえば模範的患者ともいえるだろう。もし最近憂うべき、いやまさにぞっとする事件が起こらなかつたならばの話だが。というのも彼らの一人が三週間前に看護婦を締め殺したのだが、今度もまた同じような絞殺事件が起こったのである。」<sup>12)</sup>

新時代の到来を宣言するガリレイは、理性の勝利を確信し、また民衆の時代の到来を確信している。

ガリレイ …そうだ、わたしは理性が人間に及ぼす穏やかな力を信じている。人間はその力にいつ

までも抗しきれはしない。わたしが（彼は手から石を床に落とす）石を落として、しかも石は落ちないといったら、誰もずっと黙ったままではられない。人間はそんなことはできないんだ。

…<sup>13)</sup>

しかし原爆投下による大惨事を経験した後に書かれた「物理学者たち」には、もう理性への信頼も、民衆への信頼も欠けている。そもそも民衆の姿は登場しない。というのも核の時代にあっては、人類の運命は一部の核物理学者と一部の国家権力に握られているからである。前述したとおりそもそも技術的理性そのものがイデオロギーであり、人類に大惨事さえもたらしかねないといった事実は、今世紀の忌まわしい歴史が教えるところである。デュレンマットは、科学の純粋性をナイーブに信じたブレヒトとは違って、こうした技術的理性の危うさを認識していた。次のメービウスの有名な台詞が作者の意図を伝えている。

メービウス …われわれが精神病院にとどまるか、世界が精神病院に入るかだ。われわれを人類の記憶から消すか、人類が消滅するかだ。<sup>14)</sup>

理性の勝利、科学の普遍性を楽観的に信じるブレヒト劇のガリレイに対し、デュレンマット劇のメービウスは、現代テクノロジーの「不可逆性」を鋭く認識している。原水爆に見られるように、今日のテクノロジーは、人類全体の滅亡をひき起こしかねない状況を作り出し、引き返すことのできない地点にまで到達したという陰うつで苦い認識がデュレンマット劇の根底にある。人類の英知はテクノロジーの発達に追いついていない。

メービウス …決して冒してはならない種類の危険があります—人類の滅亡もその一つです。世界が今所持している兵器で何をしでかすか、われわれはわかっています。ぼくが製造を可能にする武器で世界が何をしでかすかも、想像することができます。…<sup>15)</sup>

人類は本来宇宙にしか存在しない原子核反応に手を出してしまった。核分裂は大量の放射性物質を放出し、地球の全生命体を危険にさらし、遺伝子に大きな脅威を与える。人類はコントロール不可能な分野に手をつけた。現代は科学の進歩に人類の進歩が追いつけない危機的状況にある。「物理学者たち」の主人公メービウスは、こうした科学の置かれた状況をこう説明する。

メービウス …われわれの学問分野では、われわれは認識の限界に突き当たってしまいました。…われわれのたどる道の終わりに到達しました。しかし人類はまだそこまで達していません。われわれは時代に先駆けて戦ってきましたが、いまや誰もわれわれの後に続くものはいません。そこでわれわれは真空状態のなかに投げ出されました。われわれの学問は恐ろしいものとなり、われわれの研究は危険なものとなり、われわれの知識は人類にとって致命的なものとなってしまいました。…<sup>16)</sup>

こうして科学が現実離れ起こし、人類の脅威となった状況で、物理学者はどう行動すべきか。科学者メービウスは、科学を否定し、現実に合わせてという道を選ぶ。

メービウス …われわれ科学者にとって現実に対し降伏するより道はありません。現実はわれわれに太刀打ちできません。われわれのせいで破滅してしまいます。われわれはわれわれの知識を取

り消さなければならない。それでわたしはそれを取り消しました。ほかに解決法はありません。あんた方にとっても。<sup>17)</sup>

こうした結論に達したメービウスには、企業と組んで経済的利益を優先させるか、学問上の名誉を目指すか、国家的利益を優先させるかといった通常の科学者の選択は反人類的な決定となる。決定を迫られる天才核物理学者メービウスは、意外な選択をする。

メービウス …ぼくは貧乏でした。妻と三人の子供がいました。大学では名声が、企業ではお金がぼくを待っていました。しかしこの道は二つとも危険すぎました。そんなことになれば、ぼくの論文を公表しなければならなくなり、われわれの学問はひっくり返り、経済構造はがたがたになったでしょう。責任感がぼくに別の道をとらせました。ぼくは学問上の成功をあきらめ、産業界を見捨て、家族を運命の手にゆだねました。ぼくは道化役を選びました。ソロモン王が見えるといったらもう精神病院に入れられました。<sup>18)</sup>

ここではデュレンマットお好みの人類のための自己犠牲のテーマが顔を出している。この劇作家は、人類の英知を越えた現代科学の進歩と、家族を捨て、名誉も世間的成功も捨て、自らを捨てることによって世界を救済するという、欲望を否定した宗教的かつ反現代的な科学者の態度とのギャップを示して、世間の常識に異を唱えたいのである。

「ガリレイの生涯」でもガリレイは自説を取り消す。しかし自らの信条に従って自分の理論を取り消すメービウスの場合と違って、理性も真理も民衆も自らの側にあると確信するガリレイの場合、自らの信条に反して自説を撤回するのである。自説を撤回した理由に関する弟子との対話で、ガリレイの理想より現実を優先する「敗者の論理」が明かとなる。ガリレイは監禁中に「新科学対話」を書き上げ密かに外国へ旅立つ弟子に渡す。そしてガリレイの説は生き延びることとなる。ガリレイの台詞には戦中の亡命生活、スターリンの粛清を乗り越えてきた知識人ブレヒトの信条が投影されているのではなかろうか。

アンドレアス われわれは世間の人とこういったものでした。あの方は命を落とされるだろう。けれど自説を撤回はなさらないだろうよ。でもあなたは帰ってこられて、こうおっしゃった。自説は撤回したけど生きていくよ。あなたの手は汚れているとわれわれがいうと、空手より汚れた手のまだまだよとあなたはおっしゃった。

ガリレイ 空手より汚れた手のほうがまだまだか。現実的な響きがあるな。わたらしいな。新しい学問には、あたらしい倫理か。<sup>19)</sup>

しかし同じ十四場でブレヒトはガリレイに裏切りものとして自己断罪させている。

ガリレイ わたしは自分の職業を裏切った。わたしのしたようなことをするものは科学者の席を汚すことは許されない。<sup>20)</sup>

上のガリレイの二つの台詞には一貫性がかけているように思える。ガリレイは賢明な抵抗者なのか、それとも科学者の世界の裏切りものなのか。ハインリヒ・ゲルツはこの点についてこう書いている。「ブレヒト自身、ブレヒト劇の演出家、劇の主役も批評家もガリレイの性格について一致をみたこと

はない。いったいガリレイは進歩の裏切りものなのか、それとも密かに学問を続けるようとした理性的な人間なのか。」<sup>21)</sup> 実際のガリレイは後者であったのだが、どうしてこのような二つの解釈を可能とするような、首尾一貫しない表現が同じ十四場に並存しているのだろうか。

ブレヒトはこの十四場を広島原爆後に書き直したのだった。ブレヒトは次のような注釈を加えている。「この劇作品の初稿の最終場は今と違っていた。…彼の学説撤回が、決定的な書物を完成する可能性を彼に与えていたのだ。彼は賢かったことになっていた。カリフォルニア版では、ガリレイは弟子の賛辞を拒み、彼の自説撤回が犯罪であったこと、どんなに重要な著作によっても、その罪の埋め合わせができないことを証明している。」<sup>22)</sup> そしてブレヒトはガリレイを「裏切りもの」と断定している。「ガリレイは十七世紀の最初の三分の一世紀のイタリア知識人の標準を示している。イギリスやオランダなどの北方諸国ではいわゆる<産業革命>のなかにあつて生産力を進展し続けていた。ガリレイはその技術的な創造者でもあり、社会的な裏切りものでもあつた。」<sup>23)</sup>

ブレヒトはデュレンマット同様、常に文学の眼と社会の眼の複眼的思考をする作家であつた。この十四場の混乱は、英雄ガリレオで一貫していた初稿を、ブレヒトが広島原爆投下後「科学者の原罪」を強調して、部分的に書き直したために引き起こされたのだった。筆者としては、カリフォルニア版に対してガリレイの性格づけが明らかな点、ストーリーの展開に一貫性がある点で、作者自身の判断に抗して初稿を評価したい。初稿では、ナチズムとスターリン主義のなかで生きなければならなかつた状況にあつたブレヒトのガリレイに対する思い入れが、苦悩する英雄ガリレイに生き生きとした描写を与え、筋の展開に一貫性を与えていると思われる。また「裏切りもの」という「紋切り型表現」には、ブレヒトの政治主義・ご都合主義な側面も見え隠れしているのではないだろうか。

核時代の原水爆の製造と比べると、ブレヒトが強調するほど、「社会の裏切りもの」ガリレイにおける「近代科学の原罪」は重大ではないだろう。核時代の科学は人類を破滅させるが、ガリレイの宇宙論はそうではない。科学と権力の戦いといった点では共通しているが、両者には上述したような深い断絶がある。ブレヒトはしかし次のように書いている。「ガリレイの罪は近代科学の<原罪>とみなしうる。新しい宇宙論は、時代の革命的な社会潮流を後押しするものであつたので、新しい階級であるブルジョア階級の深い関心を引いたが、ガリレイは、その宇宙論をはっきりと限界を備えた特殊科学にしてしまった。そうした科学はその<純粋さ>ゆえに生産様式なるものとは無関係に比較的他の妨害を受けずに発展することができた。原子爆弾は技術的かつ社会的現象としてはガリレイの学問的業績と社会的無能の古典的な最終生産物である。」<sup>24)</sup>

ただしハーンとシュトラスマンの核分裂の実験に注目したブレヒトは、科学の独走に無自覚だつたわけではない。ヒロシマの後、カリフォルニア版でブレヒトは次のように書いている。ただイデオロギーとしての科学にとらわれた現代の科学者は自ら進んで悪魔の兵器を生産したのであるが。

ガリレイ …科学の唯一の目標は人間の生活の苦勞を軽減することにあると思う。もし科学者が、我欲の強い権力者に脅かされ、知識の為の知識を積み重ねることで満足するならば、科学は不具にされかねないし、きみたちの新しい機械はもっぱら人類の災いの種となるだろう。きみたちは



発見できるものをすべて発見するようになるかもしれないが、きみたちの進歩は人類の進歩から遠ざかるばかりとなるだろう。きみたちと人類の溝はいつか大きくなって、新しい発見の歓呼の叫びは、世界中の恐怖の叫びに迎えられることになるかもしれない。<sup>25)</sup>

ゲオルク・ヘンゼルはブレヒトとデュレンマットの違いを明らかにしている。「ブレヒトは、マルクス主義は世界の謎を解き、それゆえ明白な政治的立場を取ることを可能にし、またそれを要求するという意見を持っていた。彼にとってはマルクス主義は世界の公式であり世界の治療法なのである。それは十九世紀の楽観主義である。デュレンマットは自分を治療者ではなく、いつも診断者とみなしていた。彼はいかに世界は救いようもなく謎にみちているかを示している。それは神秘主義的、前科学的かつ科学的な考えである。」<sup>26)</sup>

「物理学者たち」の三人の主人公たちの科学者の自由と責任をめぐる会話は、原爆製造で、科学が人類の災いの種になることが実証された後、世界中が核兵器に怖える核の時代にある状況が前提となっている。巨大予算を必要とする現代の科学技術と、世界制覇をもくろむ軍拡を押し進める東西の帝国主義的国家権力との結びつきはもはや自明となっている。

まず精神病院に西側スパイとして潜入した物理学者、自称ニュートンのキルトンは、学問の自由を主張する。そして学問の自由の名のもとに科学者の責任問題を回避する。

ニュートン …重要なのはわれわれの学問の自由であって、他は意味がない。われわれはパイオニアの仕事をしなければならないのであって、他のことは不必要だ。われわれが開いた道の歩き方を、人類が理解しようがすまいが、それは人類の問題であってわれわれの問題ではない。<sup>27)</sup>

一方アインシュタインと称する東側スパイのアイスラーは、科学の政治性を強調する。

アインシュタイン …わたしにとって神聖なのはわが国の参謀本部だ。…われわれは誰の利益のためにわれわれの科学を利用するのかを決めなければならない。わたしはもう決心した。<sup>28)</sup>

メービウスは二人の意見を整理する。

メービウス …キルトン、あなたは学問の自由を守りたいといわれますが、その責任は否定しますね。それに対してアイスラー、あなたは責任の名のもとに科学をある特定国の政治権力に対してのみ義務を負うとしています。…<sup>29)</sup>

メービウスは二人を追い詰めて、二人の目的が国家防衛のためのスパイにあると白状させる。現代では、特に冷戦の最中であっては、核物理学は特定の国の政治権力と密接に結びついていることは万人の知るところである。地上で政治権力の及ばない安全な場所はどこだろうか。

メービウス …お二人がめいめい別の理論を売り込もうとなさいますが、わたしに差し出された現実と同じです。世界は牢獄だという事実です。それでわたしは精神病院をより気に入っているというわけです。すくなくともそこには、政治家どもに利用されないという安全があります。<sup>30)</sup>

結局人類を破滅から救うため、三人の物理学者たちは精神病院に留まる決心をする。三人の台詞にはデュレンマット演劇のキーワード<パラドックス>が見事に示されている。

ニュートン 気違い、だが賢い。

アインシュタイン 囚人、だが自由。

メービウス 物理学者、だが罪を犯さず。<sup>31)</sup>

しかし意外な結末が最後に待っている。有能な精神科医だが実は気の狂った院長が、メービウスが破棄したはずの論文のコピーを手に入れて大トラストを創りあげていた。

ニュートン もうおしまいだ。(ソファーに腰をおろす)

アインシュタイン 世界は気の狂った精神科女医の手に落ちた。(ニュートンの向かいに座る)

メービウス 一度考えられたことは、もう取り返しがつかない。(ソファーの左手の安楽椅子に腰かける)<sup>32)</sup>

一見閑閑な精神病院「桜の園」は実は監獄であり、一見平和な地球は実は破滅の一步手前にあることが、つまりこの世界は<パラドックス>の世界であることが、アインシュタインの弾く「愛の悲しみ」の悲しげなメロディーに乗って、観衆に示される。

デュレンマットは、この劇のための二十一条の注釈で次のように述べている。

十九条 パラドックスのなかに現実が現れる。

二十条 このパラドックスに向かうものは、現実にも身をさらすことになる。<sup>33)</sup>

### 3

「物理学者」執筆のヒントとなった材料については、デュレンマット自身が精神病院での経験と「エディプス」の筋の展開を挙げている。親戚の紹介で精神病院を訪問したデュレンマットは別の法則で動いている世界を見た思いがしたと書いた後、こう述べている。「そういう訳で、その時受けた印象は、ジレ訪問とわかちがたく結びついたらまますと残っていただけでなく、わたしの中でだんだんと成長し、何年か後、それが結晶してある喜劇作品の舞台環境となった。ある喜劇とは<物理学者>のことである。」<sup>34)</sup> またメービウスのモデルはエディプスであることを作者自身が言明している。「エディプスと同様メービウスは、彼の運命つまり彼の研究の技術的悪用を逃れようとするが、エディプス同様メービウスは逃亡する。そしてエディプス同様間違った道を選んでしまう。メービウスは間違った精神病院に入る。精神科女医は彼を狂気ではなく正常とみなし、かれの発見を悪用する。」<sup>35)</sup> また核による人類滅亡の恐怖というテーマはデュレンマットを強く引きつけたらしく、「物理学者たち」の十年以上前、すでに1949年に彼は喜劇「発明者」を発表している。こうした題材を検討してみると、核の時代における科学者の責任というテーマ設定、精神病院という舞台設定、「エディプス」にヒントをえたブラック・コメディという筋の設定といったこの劇作家の着想が見て取られ、「もっとも技巧的な劇の一つ」<sup>36)</sup> である「物理学者たち」の枠組みが見えてくるであろう。

つぎにこの枠組みを構成していく、デュレンマットの思想に目を向けていきたい。周知の通り、デュレンマットはブレヒトに大きな影響を受けたものの、共産主義者の立場はとらず、またプロテスタントの牧師の息子でありながら、キリスト教的世界観を信奉してはいない。彼の代表作品たとえば

「ミシシッピー氏の結婚」「貴婦人の帰郷」さらにこの「物理学者たち」に共通するテーマは、社会的には結果としてしばしば大量殺人を引き起こすイデオロギーに対する「反イデオロギー」、個人的には集団化・機械化の時代の中でしばしば存在不可能となった「自由」と「責任」、さらに責任感に極端化した「自己犠牲」が挙げられるだろう。宗教戦争やスターリン粛正やナチの大量虐殺に見られるようにイデオロギーは「自由」を束縛し、「責任」を回避させる役割を果たすことに、この劇作家は注目していた。ドイツ社会民主党の理論家オスカー・ラフォンテーヌもデュレンマットの政治的思想に触れ、時代の診断者であるデュレンマットは何よりも個人的な自由について考えた作家であるとして、デュレンマットの文章を引用している。「世界の集団化の傾向はますます増大するだろうが、集団の精神的価値はますます収縮していくことだろう。チャンスは依然として個人にのみ残されているのだ。すべてを手に入れることのできるのは個人なのだ。」<sup>37)</sup> さらに現代の個人的自由主義は、反全体主義・反イデオロギー的側面をもつだけでなく、ラフォンテーヌも強調しているように、軍事的・経済的・道徳的抑圧からの解放さらに寛容とも密接に結びついていることに注目しなければならない。

「物理学者たち」の基本的設定とデュレンマットの思想的立場に、ごく簡単に触れてきたが、最後にこの作品の成立事情について考察してみたい。ハンス・マイヤーは、ブレヒトとデュレンマットの確執に着目しながら、作品の成立事情を考察している。

ハンス・マイヤーは、メービウスの台詞にある「取り消し」(Zur]cknahme)という言葉に注目し、この物理学者の自説の「取り消し」は現代の物理学者の行動指針となるべきもので、またデュレンマットの「物理学者たち」はブレヒトの「ガリレイの生涯」の「取り消し」を目的としているとする。両作家の確執に注目すれば、当然の立論とも思われる。ブレヒトから多大な影響を受けたデュレンマットも、多くの作家がそうであるように、師ブレヒトを理論と作品の両方で批判することによって、自己を確立していったのであった。デュレンマットの実作によるブレヒト批判の成果が「物理学者たち」なのである。

ハンス・マイヤーの指摘通り、「物理学者たち」の成立を考えるうえで、1959年のデュレンマットが「シラー賞授賞演説」のなかで展開したブレヒト批判の検討は欠かせない。「われわれは改めて考え抜かねばならないことがある。それは何が国家に所属し、何が個人に所属するか。またわれわれが自由につかえるものは何か、どこで抵抗は可能か、どこでわれわれは自由かといった問題である。世界は人々が主張するほど大規模に政治革命で変化することはない。そうではなく何十億にも達する人口爆発、必然となった機械中心世界の成立、民族主義国家の現代国家への必然的な変化、大衆化社会の成立、国家から企業への忠誠心の変化によって世界は変わるのだ。人類は世界を変革することが可能だし、また変革すべきだという革命家の古い教義は、個人には実現不可能だし、すでにお払い箱となっている。」<sup>38)</sup> ハンス・マイヤーはこの演説で、演劇に関しても、今日の世界は演劇によって再現できるのか、さらに演劇によって世界は変革できるのかといった問いを、デュレンマットがブレヒトに投げかけているのだとする。しかしここではデュレンマットが、ブレヒト流のイデオロギーとしての演劇を拒否し、政治革命より社会革命に意義を認めていることに注意しなくてはならない。

この「シラー賞授賞演説」の考えをもとにして、この「物理学者たち」が執筆されたというハンス・マイヤーの指摘に異存はない。またこの文学研究家は、この戯曲のテーマをつぎのように整理している。「犠牲は必要か不必要か。個人は世界情勢に影響を与えうるか。死体が山となった喜劇。世界改革に際して劇作家は力を持つか持たないか。」しかし最も重要なテーマは、科学技術が取り返しのつかない地点まできてしまった核の時代に地球を破滅させる科学者はどう責任をとるべきかという問題であろう。世界は改革する前に破滅してしまうかもしれない。ブレヒト、そしてハンス・マイヤーに欠けているのは、こうした危機意識である。また自らの十九世紀的な政治信条を頑なに信じて、世界改革を唱えるブレヒトに欠けているのは、人間の有限性・可謬性の自覚である。少なくともこの点でも、筆者はデュレンマットの「物理学者たち」はブレヒトの「ガリレイの生涯」を越えていないとするハンス・マイヤー論に異議があり、「物理学者たち」は核がテーマとなった劇 (Atomst]ck) の傑作であり、「ガリレイの生涯」に決して劣る作品ではないと考える。

#### 註

「物理学者たち」のテキストはFriedrich Dürrenmatt: Werkausgabe in 37 Bänden, Diogenes Verlag, 1998, Bd.7 を使用した。以下デュレンマットのDiogenes版全集にWAの略号を使用する。

またブレヒトからの引用はBertolt Brecht: Gesammelte Werke in 20 Bänden, Suhrkamp Verlag, 1968 を使用した。以下ブレヒトのSuhrkamp版全集にはGWの略号を使用する。

- 1) 藤永 茂「ロバート・オッペンハイマー 愚者としての科学者」, 朝日新聞社, 1996年, 342頁。
- 2) 佐々木力「科学論入門」, 岩波書店, 2000年, 124-125頁。
- 3) ユルゲン・ハーバーマス「イデオロギーとしての技術と科学」長谷川 宏訳, 紀伊國屋書店, 1991年, 72頁。
- 4) ハーバーマス, 前掲書, 49頁。
- 5) ハーバーマス, 前掲書, 47頁。
- 6) ハーバーマス, 前掲書, 78頁。
- 7) 佐々木, 前掲書, 180-181頁。
- 8) GW.Bd.17, S.1109.
- 9) 野村 修「ブレヒトの世界」, お茶の水書房, 1988年, 368頁。
- 10) WA.Bd.7, S.93.
- 11) GW.Bd.3, S.1232f.
- 12) WA.Bd.7, S.13.
- 13) GW.Bd.3, S.1256.
- 14) WA.Bd.7, S.76.

- 15) Ebd., S.73.
- 16) Ebd., S.74.
- 17) Ebd.
- 18) Ebd., S.73f.
- 19) GW.Bd.3, S.1237f.
- 20) Ebd.,S.1341.
- 21) Heinrich Goertz, Friedrich Dürrenmatt, Rowohlt, 1997, S.84.
- 22) Ebd., S.1133.
- 23) GW.,Bd.17, S.1133.
- 24) Ebd., S.1109.
- 25) GW.Bd.3, S.1340f.
- 26) Georg Hensel, Der Dramatiker nach Kierkegaard und Einstein : in Herkures und Atlas, 1992, S.30f.
- 27) WA.Bd.7, S.70.
- 28) Ebd., S.73.
- 29) Ebd., S.72.
- 30) Ebd., S.73.
- 31) Ebd., S.77.
- 32) Ebd., S.85.
- 33) Ebd., S.93.
- 34) Friedrich Dürrenmatt, die Irrenanstalt : in play Dürrenmatt, Diogenes, 1996, S.167.
- 35) Friedrich Dürrenmatt, die Physiker und das Orakel von Delphi : in play Dürrenmatt, Diogenes, 1996, S.168.
- 36) Elisabeth Brock-Sulzer, Friedrich Dürrenmatt, Diogenes, 1986, S.113.
- 37) Oskar Lafontaine, Friedrich Dürrenmatt - der politische Essayst : in Herkules und Atlas, Diogenes, 1996, S.198.
- 38) Hans Mayer, Brecht und Dürrenmatt oder die Zurücknahme : in Frisch und Dürrenmatt, Suhrkamp Verlag, 1992, S.33f.
- 39) Hans Mayer, S.35.